

イギリス人ジョン・グールド(1804-81)は19世紀の博物学を代表する人物として知られている。彼は「バードマン」と呼ばれるのを好んだほど、鳥の研究と図譜の制作に生涯を捧げた博物学者である。彼の制作した主な鳥類図譜には『ヒマヤマ脈百鳥図譜』『ヨーロッパ鳥類図譜』『オオハシ科鳥類図譜』『キヌバネドリ科鳥類図譜』『オーストラリア鳥類図譜』『アメリカ産ウズラ類鳥類図譜』『ハチドリ科鳥類図譜』『アジア鳥類図譜』『英国鳥類図譜』『ニューギニアおよびパプア諸島鳥類図譜』などがあり、いずれも縦56×横39センチメートルのインペリアル・フォリオ判である。これらの図譜は石版画(リトグラフ)の技法を使い、手彩色で仕上げられている。石版画というと、多くの人は画家たちが制作した版画作品としての石版画を思い浮かべるかもしれないが、博物学の分野でつくられた図鑑にも石版技法を用いて制作された素晴らしい出来のものが多くある。その中でも最高の図譜として絶賛されたのが、グールド制作の鳥類図譜である。

石版画は水と油が反発しあう性質を応用した平版印刷である。この印刷技法はプラハ生まれのアイロス・ゼネフェルダー(1771-1834)によって考案されたが、この技法を彼が見つかるまでの道のりは決して平坦ではなかった。ゼネフェルダーの書いた『石版術教程』によると、売れない劇作者であった彼は、自作の戯曲を印刷業者に頼むより、自分で印刷することで、経費を削減しようという理由からさまざまな印刷技術を試みていた。その過程で1795年に手製のインク(蝋、石鹼、煤から合成したもの)で文字を書いた石灰石の板の表面を稀硝酸に浸しておくと、約5分でインクのついていない部分が薄い紙の厚さほど低く腐食されていることに気づき、それを凸版として、印刷できるようなプレス機の改良や転写法の研究を行った。この年バイエルンの宮廷音楽家フランツ・グライスナーと「グライスナー&ゼネフェルダー」という印刷会社を設立し、楽譜の印刷を行っている。また石版面に文字を書くのに最適で、かつ硝酸の影響を受けないインクも開発した。彼はこうした



シロムネオオハシ『オオハシ科鳥類図譜』

研究を重ね、改良を加えていくうち、1797、8年頃に石灰石に石版用クレヨンで描き、硝酸を混合したアラビアゴム液を塗って、乾燥させたあとで水拭きすると水分を保持することを発見した。ここに、印刷インクは水分のあるところにはつかず、脂肪性クレヨンで描いたところだけにインクがついて、複数の印刷が可能になるという化学的な平版印刷法が創始されたのであった。

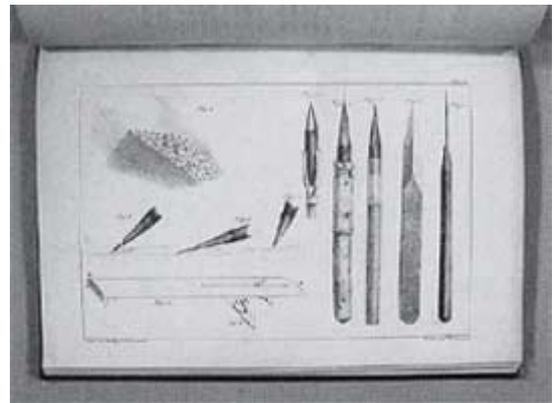
1820年代になるとゼネフェルダーとオッフエンバッハで楽譜印刷工房を営んでいたヨハン・アントン・アンドレとの精力的な活動によって、ヨーロッパの大都市には石版印刷工房が数多くみられるようになった。イギリスでは、早くも1801年に石版による印刷法の特許状が下された。ゼネフェルダーは彼と組んで石版による印刷の普及に尽力したヨハン・アントン・アンドレに権利を譲渡し、それにより、ヨハン・アントンの弟フィリップがロンドンに石版印刷工房を設立したが、イギリスにおける石版画普及のはじまりであった。フィリップはハインリヒ・フュースリ、リチャード・クーパーなど何人かの芸術家の協力を仰ぎ、石版による見本画集を制作した。イギリスで活動した初期石版画家としてはそのほかに、コンラー

ト・ゲスナー、ジェリコー、《イタリア 24 景》の作者であり、水彩画を石版印刷で忠実に再現する方法を完成させたチャールズ・ヨゼフ・ハルマンデルや、後にフランスに移住したリチャード・パークス・ボニントンなどがあげられる。1822 年にロンドンで出版されたハルマンデルの『ブリタニアの輪郭』は、イタリアの「ピトレスクな旅」をタイトルにして何枚かの版画をまとめるという形式を生んだといわれている。

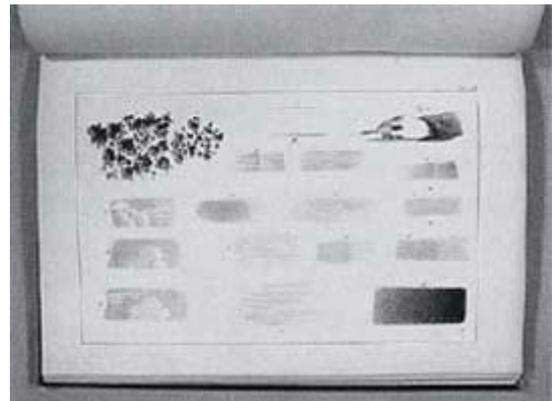
イギリスで石版への関心が特に高まったのは、1819 年になって印刷業者および本屋であったルドルフ・アッカーマンが、ミュンヘンのゼネフェルダー自身から送られてきた印刷機を使って美術協会でデモンストレーションを行った頃からである。アッカーマンは、ゼネフェルダーの『石版印刷術全書』(1819 年) の翻訳、そしてハルマンデルの『石に描く術』(1824 年) の 2 冊の手引書を出版している(後にハルマンデルはグールドの鳥類図譜の刷り師として重要な役目を果たす)。

グールドが『ヒマラヤ山脈百鳥図譜』(1830-32) を制作する企画に乗り出した時、それまで博物画の分野で多く使われてきた木版画や銅版画ではなく、石版画を選んだ理由については、その特徴について考えれば一目瞭然だといえる。石版画は版をつくるにあたり、木版や銅版のように版材を彫刻したり、腐食したりする技術的工程がないことである。つまり、作者自身が絵画と同じように版面に自由に描画することができる。このことは他の版画技法にみられるような、偶然的な効果や意外性を期待することはできない反面、絵画的要素を強く持っているため、しなやかな曲線や水彩画のような柔らかな表現も容易である。したがって絵画的要素をその版面から直接再現できる。また版をつくるにあたって、木版画や銅版画よりは安価にできる点も考慮したのであろう。その頃の豪華本の販売方法は今のようにある一定部数つくるのではなく、ほとんどが予約制であった。予約をとるために、見本ともいべき第一分冊を出して実物を見てもらい、分冊を出しながら、生じた利益を次の分冊へとつないで、本を完成させていったのである。

グールドの鳥類図譜を完成させる工程は、まず



石版用ペンの図：ハルマンデル『石に描く術』



石版の描線・描法：ハルマンデル『石に描く術』

グールドの監督のもと、下絵をつくることから始まる。グールド自身が下絵を描いたものもある(カンサス大学のエリス・コレクションにみられる)が、ほとんどは彼のラフスケッチや指示図にしたがい、絵師が(妻のエリザベス・グールド、エドワード・リア、のちに H.C.リヒター、ウィリアム・ハート、ヨゼフ・ヴォルフ)が水彩で下絵を描き、それをもとに石版に画像を反転させた形で転写される。版材として用いられたものは石灰石である。なかでも始祖鳥の化石で有名な南ドイツのゾルンホーフ産のものが最適とされる。石版はプレスの際にかけられる圧力に耐えられる、10センチに近い厚みを必要とする。石版用の描画材としては筆やペンで描く解墨、その後あらわれるクレヨンが代表的なものである。ハルマンデルの『石に描く術』にはその当時の描画材やプレス機の図が掲載されている。グールドはその頃イギリスで最高の技術を誇っていたこのハルマンデルを刷り師としていた。ハルマンデルは 1830 年から制作が開始された『ヒマラヤ山脈百鳥図譜』から 20 年近く鳥類図譜の印刷に担当した(ハルマンデル亡き後はウォルトン、ウォルター、ウォル

ター&コーン、ミンターン・ブラザーズが印刷を請け負った。刷り上がったものに今度はガブリエル・ベイフィールドなどの色着け師が手作業で着色する。出来上がった石版画はある程度の枚数が揃った時点で解説を添え、購入希望者のもとに送られた。購入者は送られてきた分冊がすべて揃ったのち、各自で製本していたのである。

グールドの鳥類図譜をみるとまず、標本や実際の観察をもとにした形態と生態を忠実に再現しているのは勿論であるが、鳥たちのいきいきした姿が目を引く。特に鳥の羽毛の光沢がよく表現できているのに気づくであろう。これは手彩色で着色されたのちに、最終工程としてニスで薄くかけている部分があることによる。油彩画に使われている仕上げ用ニスは彩色層に深みと光沢を与え、かつ汚染物質が直接画面に付着したり、大気の影響をある程度防ぐことを目的に用いられている。しかしグールドの場合は、石版画にこれを使うことで表現効果をねらったものである点に注目したい。このようなニスによる効果は最初の図譜である『ヒマラヤ山脈百鳥図譜』から用いているが、その後鳥と一緒に描かれている植物の表現などにも用いられ、リアルさと同時に立体的効果を生む画面をつくりだしている。

油彩画では乾性油、乾性油と樹脂が混合した油性ニス、揮発油に樹脂を混ぜて使う樹脂ニス、広葉樹からの水溶性分泌液、卵白、ロウ、また近年では合成樹脂など、時代や地域、使う人によっていろいろなニスが試みられている。グールドが用いたニスがどのような性質のものかは、科学的に分析する以外に方法はないが、紙に手彩色という条件を考えると油性のものより、水溶性のニスをを用いている可能性が高いと考えられる。

また特筆すべきは、『ハチドリ科鳥類図譜』で使われている金属箔を貼り、その上に色を着色して羽毛の光沢を再現する技法である。金箔を画面に使うことは西欧では古くから行われ、黄金背景を持つ絵画やアイコンなどにその例を見ることができ、グールドはハチドリの羽毛の光沢部分に金あるいは銀箔を使うことで、より軽やかに、そして輝くような感じを生み出すことに成功している。1851年に開催されたロンドン万国博覧会では、動



オナガラケットハチドリ『ハチドリ科鳥類図譜』

物園の特設会場でハチドリのコレクションを展示したり、紙に金属箔を貼って、その上に絵の具とニスでハチドリの羽毛の光沢を再現するデモンストレーションを行っている。

初期の石版印刷業者たちは、石版術を主に商業や教育などの分野に有効な印刷方式と考えていた。しかし、石版画の創始者ゼネフェルダーが自書の中で「新しい技術は、根本原理の点で、ほとんどその誕生の当初ですでに高い完成の域に達していた。……今や問題は、ちょっと見渡しただけでもすでに多くの優れた利用法を提供しているこの新技術にとって、それにふさわしいすぐれた芸術家と職人とが一刻も早く現れてほしいということだけである」といったように、石版画がそれ自体で表現の一手段となりえるものを備えていた。グールドの鳥類図譜が出版事業として成功したのは、彼のもとで働いた人々の果たした役割もさることながら、何よりグールドが目指した方向性によるものが要因のひとつであろう。博物学の図譜はどちらかという対象をリアル、かつ細密に表現していく傾向、そして生態や環境を重視していく傾向に分かれていく。しかし、グールドの鳥類図譜はどちらかにかたよることなく、両方をあわせもち、そのことで彼の制作した図譜は科学と芸術が融合した魅力的な表現になりえたのではないかと思える。